

3月13日 マルコによる福音書3章20～27節 今日の説教から  
説教題：「内輪争いの末路」

私たちが信じる唯一の神様は、「善なる神様」です。悪の神と善の神がいて、それが戦い合っているような多神教の信仰ではなく、私たちは唯一の神様に対する信仰を持っています。その善なる神様が世界を作ったのに、神様自身は善なる存在であり天地創造において作ったすべてのものが「良いものである」と認めるほどであったのに、どうして世界の中に「悪」がなくならないのでしょうか。大国による戦争や、人々を苦しめる貧困、また多くの人々の命を奪う大災害も、私たちの立場から言えば「悪」と言わざるを得ません。しかし、世界のすべてのものが神様からもたらされているのであれば、「悪」もまた神様から来るものなのでしょうか。

そのような疑問を解決しようとする神学として、かつての人々は「神義論」「弁神論」という形で神様のことにより深く理解しようと考えました。「全知全能、完全に善である神様ならば、悪のない世界を創造できたはずなのに、現実には悪人が存在し、善人が虐げられ、自然災害も絶えることがない。すべてのものの根源が神様であるのなら、悪の原因も神様なのではないか、神様は不正義を放置しておくのか」。こうした疑問に対して神様を弁護し、正義について論じるものが神義論であると言われています。聖書の中でもこの問題はヨブ記によって展開されています。ヨブ記の主人公ヨブは、神様が認めるほどに信仰的に正しい人生を送っていました。しかし、「ヨブが神様への信仰を保てているのは、多くのものを持っている恵まれた人生だからではないか。すべてを取り上げられたらその態度も変わるものではないか」と考えたサタンによって、ヨブは理不尽な災いに襲われることとなります。そして、ヨブ記の1章2章において、ヨブに災いを与える許可を出していたのは、紛れもなく神様でした。

今日の聖書箇所においても同じくサタンが登場しますが、ここでイエス様は「悪霊やサタンも秩序だって成り立っている」ことを人々に語ります。サタンは、戦争を起こす人間たちのように内輪もめをしない、だから「サタンは自然に滅びることはない」と言っているのです。悪は秩序だってこの世にはびこって、そしてそのまま神様の力が働かなければいつまでもこの世に残り続けるのです。では、その力はどこから来るものなのでしょうか。この「悪」というものに対して、アウグスティヌスという神学者は「行う悪」と、「受ける悪」の二つの側面について指摘しました。彼は「神様が正義であるからには、善人にはいい報いを与えて、悪人には罰を与えるはずだ。悪人が受ける罰は、その本人からすれば紛れもなく『受ける悪』だろう」と考え、そしてそれと同じく人間には「悪を行う力」があると考えました。それは、神様が人間に与えた「自由意思」によって悪を行う力です。

この自由意思は、私たちが正しく生きるために与えられているものです。私たちは自分の意思で神様のことを学んで、自分の意思で信仰の告白をして、自分の意思で正しい人生を歩むことが許されています。ただ、その自由を悪用することによって、私たち人間は容易に悪を行うことも出来るのです。

私たちは争うことも出来て、平和であることも出来ます。ただ、平和であることよりも争いや略奪を選択した方が得をする状況が多くあり、それでも隣人のために、神様のために平和を選択することが出来るからこそ、私たちはそれを「善」として行うことが出来るのです。

「できるけどしない」、その事が私たちを善へと、正義へと導くのです。

私たちが生きるこの世界には、確かに悪としか呼べないような存在があり、その存在を許す神様がいます。それほどまでに人間に自由を与えて、それでも神様は私たちが信仰によってイエス様に導かれる 것을望んでいるのです。人間中心の自由な奔放さから悔い改め、神様中心の自由な信仰へと導かれる事を、神様は期待してくれています。私たちは、神様から許された自由によって、内輪争いではなく平和を実現する喜びを知っています。その喜びを胸に、今週一週間の歩みを、これから歩みを共に進めていきましょう。

## 今日の説教箇所：マルコによる福音書 3章 20～27節

- 20: イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言っていたからである。エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はペルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言っていた。そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。国が内輪で争えば、その国は成り立たない。家が内輪で争えば、その家は成り立たない。同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。